

大阪市生物多様性戦略 概要版

第1章 大阪市生物多様性戦略の策定にあたって

(本体P1~5)

大阪市生物多様性戦略の位置付け (本体P2)

「生物多様性基本法」第13条に基づき、生物多様性国家戦略2012-2020を基本として定める生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な計画

大阪市生物多様性戦略の計画期間 (本体P2)

2050年のめざすまちの姿を展望しつつ、計画期間は2020年度までの3年間

大阪市生物多様性戦略の目標 (本体P2~3)

2050年までのめざすまちの姿

「生物多様性の恵みを感じるまち」

2020年度までの目標

「愛知目標」や「持続可能な開発目標 (SDGs)」など世界の動きを踏まえた生物多様性の保全をめざします。

生物多様性の保全のため、市民・環境NGO/NPO・民間事業者・研究機関・教育機関・行政などとの

パートナーシップの仕組みを形成します。

生物多様性の意味を知っている市民の割合を50%以上にするとともに、自然や生き物を身近に感じる市民を増やします。

大阪市生物多様性戦略の取組みの対象区域 (本体P3)

大阪市全域

大都市でありながら身近なところに貴重な自然があり、自然や生き物との関わりを実感できるまち、都市にいながら生物多様性の恵みを受けていることを多くの人々が実感し、生物の多様性を守る行動につなげているまち

第2章 生物多様性とは

(本体P6~17)

生物多様性とは (本体P7~8)

生き物はそれぞれに個性があり、つながり合って生きています。この生き物たちの豊かな「個性」と「つながり」を生物多様性といいます。生物多様性には、「生態系」、「種」、「遺伝子」という3つの多様性があるとされています。

生態系の多様性

森林、河川、干潟など、いろいろなタイプの自然がある。



十三干潟

種の多様性

動植物や細菌など、いろいろな生きものがある。



チョウトンボ

遺伝子の多様性

同じ種でも異なる遺伝子を持つため、形や模様などの個性がある。



ナミテントウ (写真: 中谷憲一)

生物多様性がもたらす4つの恵み (本体P8~12)

供給サービス

私たちが生きていく上で必要な食べ物、衣類、燃料などを提供する働き



ヤマトシジミ

調整サービス

森林による土砂崩れ防止、洪水防止など、環境を制御し安定させる働き



柴島干潟

文化的サービス

文化面や精神面において私たちの生活を心豊かで楽しいものにする働き



©国立文楽劇場

基盤サービス

光合成による酸素供給や土壌の形成など、生命が生存する基盤を提供する働き

生物多様性の4つの危機 (本体P13~16)

開発など人間活動の拡大による危機



森林伐採

自然に対する働きかけ(人間活動)の縮小による危機



手入れされなくなった森林

人間により持ち込まれたものによる危機



オオクチバス

ヌートリア

地球環境の変化による危機



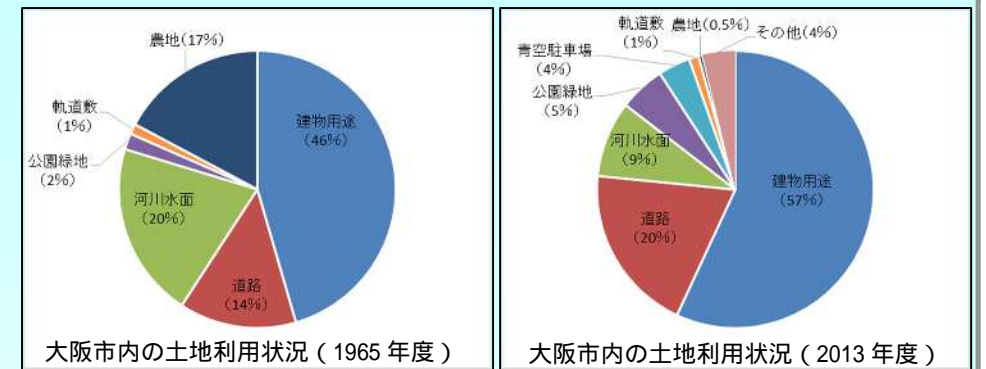
氷河の減少

第3章 大阪市の生物多様性の状況

(本体P18~29)

土地利用の変遷 (本体P20)

約50年間で建物用途と道路が増加し、市街化が進みました。一方で、生き物の生息・生育空間となりうる河川水面や農地は大きく減少しました。



大阪市内の土地利用状況 (1965年度)

大阪市内の土地利用状況 (2013年度)

市内の貴重な自然 (本体P21)

ほぼ全域が市街化された大阪市にも、淀川ワンド群やまちなかの社寺林など大切な自然が残されています。

淀川 (城北ワンド)



社寺林 (住吉大社) 提供: 住吉大社



野鳥園臨港緑地 (もと南港野鳥園)

新たな生息・生育空間 (本体P21)

近年の都市整備により、屋上緑化など新たな生息・生育空間が創り出されています。

新梅田シティ 新・里山



なんばパークス



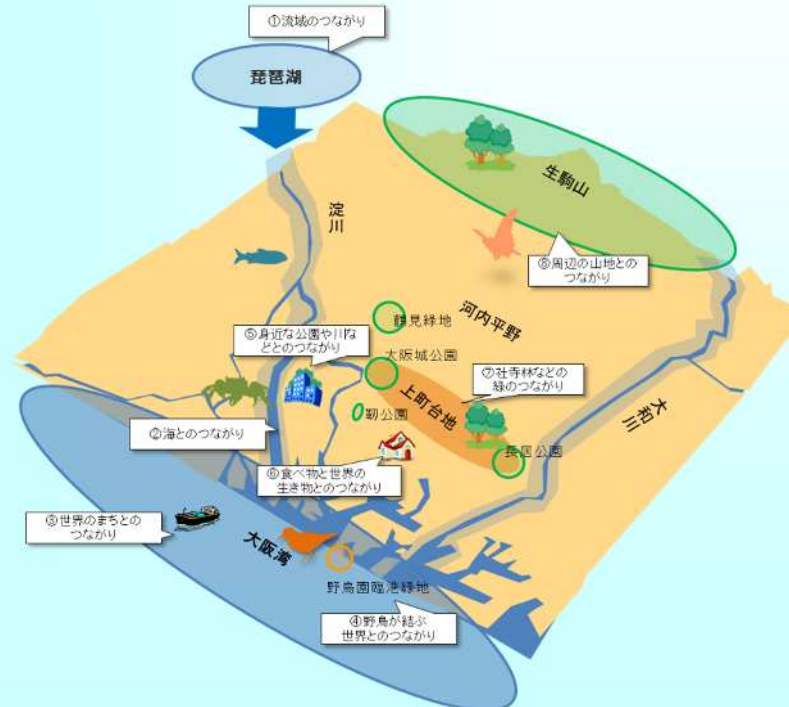
大阪役所 屋上緑化

周辺エリア・世界とのつながり (本体P24)

大阪は琵琶湖や生駒山、大阪湾といった豊かな自然に囲まれており、淀川や大和川などを通じて、周辺エリア、さらには世界へとつながっています。このようなつながりの中で、大阪市のエリアは重要な役割を担っています。

大阪市内の生き物の現況 (本体P25~29)

これまで大阪市内で確認された生き物は4,502種。そのうち、既に43種が絶滅しています。現在生息・生育している4,459種のうち、556種の在来種は個体数が少なく、保護が必要となっています。(詳細はP93~112参照)



保護上注目すべき生き物



コアジサシ



ミナミメダカ



ヒヌマイトトンボ
写真: 森岡賢史撮影



ワンドスゲ

第4章 私たちの暮らしと生物多様性の関わり

(本体P30～39)

大阪の歴史・文化と生物多様性とのつながり (本体 P30～32)

古代～中世: 海を望む台地に誕生した都 近世: 日本国中の生き物に支えられた大阪文化 近代: 世界中の資源を消費する時代へ

なんで「なにわ」なん?
大阪の自然を今に伝える



上町台地の北端付近の潮の速さから「浪速(なみはや)」と呼ばれ、「難波(なにわ)」と訛った。豊かな海の恵みを生み出す大阪湾を「魚(な)の庭」と呼んだ説など、諸説あります。

なにわは食の発信地
諸国の生き物の賑わいに支えられた商業都市



大阪と言えば「食い倒れ」。江戸時代、大阪は諸国の食材や特産物が集まる「天下の台所」として日本一の商業都市に発展しました。

なにわにもあるんやで、伝統野菜
発展するまちを支えた野菜たち



田辺大根、金時人参など、様々な「伝統野菜」が生産され、発展する大阪のまちの消費を支えてきました。

文案もそうなん!?
クジラのヒゲが支える伝統文化



大阪が誇る伝統芸能「文楽」セミクジラのヒゲを使った仕掛けが、文楽人形の芸術的な動きを可能にしています。

そして今...
大都市に住む私たちの日々の暮らしは、自然や生き物に支えられています。



大阪市内の生物多様性関連施設等 (本体 P33～36)
研究機関 展示施設

自然史博物館



体験学習施設
自然体験観察園
(花博記念公園鶴見緑地内)



天王寺動物園



自然と触れ合える施設
住吉大社



提供: 住吉大社

海遊館



新梅田シティ 新・里山



民間事業者の取組状況 (本体 P37～38)

大阪市内に本社を置く企業においても、国内外の生物多様性の保全に積極的に貢献している事例が見られます。

取組事例

- 屋上緑化やビオトープ、森林などの整備
- 木材調達における「森林破壊ゼロ」の宣言・実践
- 熱帯雨林の破壊を引き起こさない持続可能な原料(パーム油)の調達、熱帯雨林における森林再生活動の推進
- 小学生を対象とした環境学習や自然観察教室などの開催

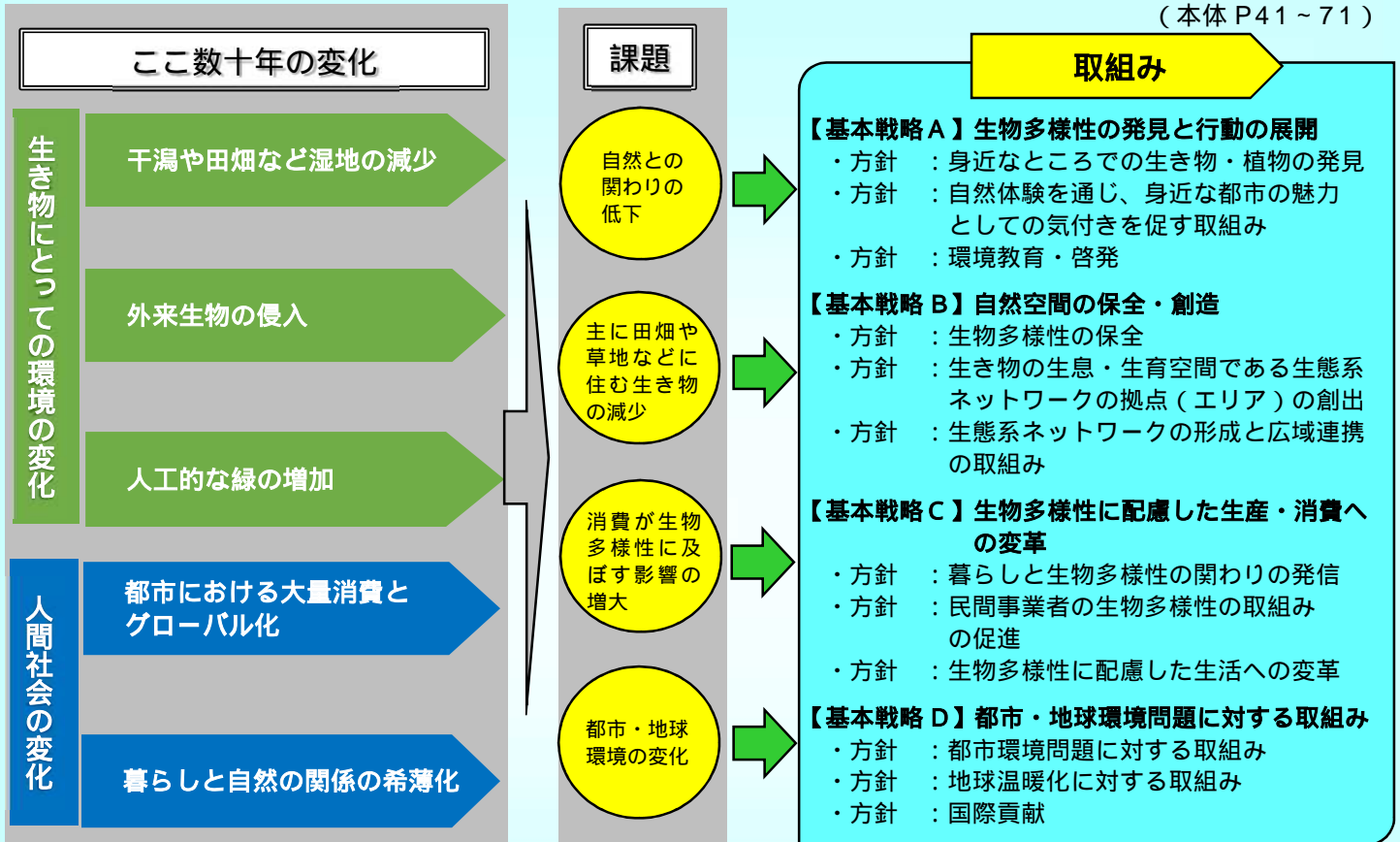
環境 NGO/NPO などの取組状況 (本体 P38～39)

- 自然や生き物をテーマとして活動する環境 NGO/NPO 団体などが数多くあり、自然観察会や環境に関する講座の実施など、様々な取組みが進められています。
- 市民、環境 NGO/NPO 団体、民間事業者の間で緩やかなつながりが形成されており、連携した取組みが進められています。

第5章 目標達成に向けた取組み

(本体P40～71)

(本体 P40～41)



大阪市の強み・資源を活かす

- | | |
|------------------|---|
| 1 市内の貴重な資源 | 5 民間事業者・環境 NGO/NPO など多様な主体間のつながり、取組みの展開 |
| 2 新たな生息・生育空間 | 6 市民やインバウンドに支えられた大きな消費市場 |
| 3 周辺エリア・世界とのつながり | 7 世界に貢献できるネットワーク、技術・知見の蓄積 |
| 4 関連施設を集積 | |

第6章 大阪市生物多様性戦略の推進に向けて

(本体P72～74)

花博記念公園鶴見緑地にある環境活動推進施設(愛称「なにわE.C.O.スクエア」)を拠点に、生物多様性に関する様々な主体が集い、情報を共有し、つながりをさらに強化・拡大していくため、新たな連携・協働の仕組みを創設し、既存のネットワークの仕組みも活用しながら、様々な主体と連携・協働します。

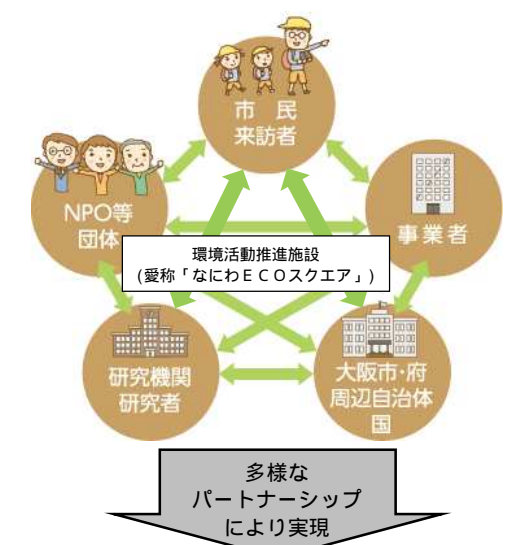
生物多様性を身近に感じてもらえるよう、各主体が行う取組みの情報発信を積極的に行います。

教育の場を積極的に活用し、将来を担う子どもたちへの普及啓発の強化に取り組めます。

戦略の目標達成状況や取組みの状況について、毎年点検を行い、点検結果は毎年度、大阪市環境審議会に報告を行い、ホームページで公表します。

- 生物多様性のモニタリング・評価及び進捗管理の手法や、各主体との連携・協働の仕組みのバージョンアップなどについて検討を行い、次期戦略に反映していきます。

新たな連携・協働の仕組み 概念図



多様なパートナーシップにより実現
大阪で暮らす人・働く人・学ぶ人、大阪を訪れる人が生物多様性の恵みを感じるまちを実現